
光と闇の法剣-Side:A-

水瀬藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と闇の法剣 -Side:A-

【Zマーク】

N4857A

【作者名】

水瀬藍

【あらすじ】

時と場所を違えて紡がれる恭子の知らない物語。幾つもの運命を知ることによつて眞実は明らかになる。

大切なひとを失いかけた。そして、大切なものを失くした。
それはまだ何も知らなかつたとき。純粋な想いだけで護れると信じていたころ。

示された道はひとつではなかつた。ただ、選ぶべき道は決まって
いた。

復讐 - - ではない。

心に抱いたのは「憎い」ではなく、どうまでも「許せない」とい
う感情。

一人の少年に出会つたとき、鏡の中の自分を見たような、そんな
錯覚に陥つた。

映し出されるのは、深い悲しみと、強い怒り。

彼は闇を受け入れた。私もまた光を捨てた。
たつた一瞬。すべてを終わらせる、そのときのために。
せめて、大切なひとが幸せでいられるように、私たちは闘つ。

* * *

対邪族の拠点となる主要都市におかれの司令室のうち、本家に近
いところにある支部。そここの副司令官 - - 司令官が失踪したいま、
実質上の司令官代理である - - 風見祐里は、近年まれにみる嬉しく
もない忙しさに頭を悩ませていた。

「 - - 副司令、邪族反応です。総数、三一！」

いつたん落ち着いたかに見えた邪族の襲撃だが、ふたたび司令室
に緊迫した空気が広がる。

オペレーターの報告に心の隅で焦りを感じながらも、つとめて平
静を装つた。祐里の不安は伝染する。イコール指揮系統の麻痺につ
ながるからだ。うぬぼれでなく、そのことをわかつていて。

「邪族の特定を急いで。現在位置は？」

薄暗闇に浮かぶモニターに映し出された周辺地図に、いくつもの光点が輝いている。不気味に赤く光っているのは、すべて邪族の存在を示すものだ。

新たに加えられた光点は支部のすぐ近く。

「双灰峰の手前……黒家の私有地に向かう道です！」

「なっ - -」

かつて御神の灰家があつた場所。そして、現在はどぶねずみの隠れ家となつてているはずの場所。しかし、こんな大胆なことをするものか。

祐里は一瞬だけ、通信席に座つた少女に目をやつた。

「すぐ映像を出して！それから - -」

「邪族の特定、終わりました。ランクAの低位邪族が一体、二体の中位邪族はそれぞれランクDとランクC！モニターに出します」

「 - - 低位のほうには一般隊員を回して。誘導は情報部に任せます。中位のほうには作戦部からレベル4以上の隊員を」

指示に従つてオペレーターが各所に通信を行う。的確かつ迅速な対応。まだ若くして指揮系統に配属されているのは、その指導力と判断力の賜物だった。

しばしモニターを見つめ、そこで違和感を覚える。普段は見慣れているために流し見ることが多いのだが、いつもとは違つた感じがした。

「 …… 映像、拡大できる？」

緑の繁る山々を背景に靈体の邪族がたたずむ。専用のカメラでなければ撮れない、ある意味お宝映像だが、そのかたわらに - -

「 …… 男の子？」

誰かの呟きに、はつとさせられる。

「御神三家のライブラリで照合。一致する人物がいないか調べて！」

祐里の発した言葉に、その場の全員が息を呑んだのがわかつた。邪族と動く人間を組織の中に探すこと。それはつまり、裏切り者が

内部にいるということだから。

「黒の波動は？」

「いえ……反応ありません」

「そう」

邪族と契約して闇を受け入れた者には、邪氣とは違う特有の気配がする。それを組織では、黒の波動と呼んでいた - - このネーミングは一種のあてつけだ。

たいていの人間は、闇に侵食された時点で自我を失い、人の姿を維持できなくなるのだが、高位の靈能者に限って原形を保つことがあつた。その例を一人知つている。

一年前 - - あの忌まわしい邪神事件を起こした研究部の人間。禁断の呪によつて靈質の高い生物を喰らい、邪族と契約しながらも黒の波動を隠し通して何人もの犠牲を出し、御神三家を危機に陥れた男。

「 - - 副司令、本家から直通回線で通信です」

自分を呼ぶオペレーターの声に、祐里は我に返つた。

「 本家から? 出して! - -

モニターに白髪混じりの中年の男が現れる。昔から変わらない、他人を寄せつけない鋭い目つきをした御神の人間。

「 黒の家長.....」

珍しい本家からの通信。それだけでなく、まさか、巷で話題の神代重成が出てくるとは。

祐里はおもわず、また通信席のほうを見てしまった。

「 - - 副司令の風見祐里です。何か緊急の用件でしょうか? 邪族の対応に追われているので、手短にお願いしたいのですけれど」

明らかに嫌味が含まれているような口調になつてしまつたが、許容できる範疇だろう。指揮系統では上下関係といった序列がそれほど厳しくない。敬語を使うことは当たり前だが、権限としては同等に近いものが与えられている。

それに - - 感情を抑えきるのは、なかなか難しかつた。

「通達だ。作戦部の星野恭子の召集を禁止する」

「は？」

表情を崩して間抜けな声を出してしまつ。

「奴らが邪族と共に人間を動かしたといふことは、法剣のありかに見当がついているといふことだらう。わざわざ向かわせることもあるまい」

「それは、そうですが……」

「人間は絶対に逃がすな、捕らえろ。場合によつては殺しても構わん」

「そ、それは - -」

「家長会議での決定だ。総帥に別件の用があるため、私が代行している」

「 - - つ - -」

あまりにもふざけた物言いに、理性の糸が切れそうになつた。完全になめられている。それとも、挑発しているつもりか。どちらにせよ、ろくなことではない。

緊急時であろうとも総帥の代行は認められていない。そもそも、御神三家において最高機関である家長会議は、二年前から凍結されていて一度も開かれていなかつた。いやそれよりも、まだ報告するしていらないのに邪族と人間の出現を知つていることがおかしい。これでは自分が『向こう側』だと言つているようなものではないか。それに - - 人を殺せ、と？

祐里は人を殺したことがあった。自分に嫌悪を覚え、行為に恐怖を覚える。そのうえでの、殺人。けれど相手は元人間であつて、邪族と契約した者に限る。反応もない、明らかに『人』を殺せとは異常な命令だ。

組織の人間はさすがに馬鹿ではない。気づいた者も多いだろう。祐里が黙つてゐる数秒間、皆が息を詰めて行く末を案じていた。

「……わかりました。では、失礼します」

答えると同時に黒の家長が通信を切つたことで、今度は祐里の決

断に注目が集まる。

「どうすればいい？」

決まっている。なめられているのなら、思い知らせてやる。挑発されているのなら、乗つてやればいい。結局、することは変わらない。自発的か、受身か、その程度の違いだ。

「現状を維持して、邪族の殲滅を最優先とします。できれば、対象の人間には接触しないように。それから、以後の本家からの通信はすべて無視しなさい。回線を遮断しても構わないわ。責任は私が取ります。いいわね？」

滅茶苦茶な指示に、だがしかし、ほっとしたような安堵の溜息も聞こえてくる。

「誰も異議はないの？」

祐里の問いに、何人かが苦笑で応えた。

「ここは、副司令の指揮下ですか？」

「ありがと」

信頼を言葉にしもられて、その場の全員に感謝の意を表した。

祐里は考えていた。恭子を召集してはいけないわけ。黒の家長が言った建前も、確かに重要な理由はある。しかし、ふざけた通信の内容からして、信じることなど到底できなかつた。

だが、神代重成という人物がそんな簡単なミスを犯すかといったら、むろんノーだ。誰でもそう答えるだろう。けれど、その先入観さえなければ、本当に恭子を対象の人間と逢わせたくないだけだとしたら？

彼は現れてから一步も動いていない。年の頃は十五、六くらいだろうか。会つたことはないと思うのだが、その顔に見覚えがあつた。

「まさか……」

真っ先に浮かんだ名前に、祐里は言葉を失つた。

「加奈」

「はい？」

オペレーターのひとりが振り向く。周りにはほとんど知られていないことだが、この少女は黒家の……神代家の末娘である。とある事情から預かっている、大事な……人間だ。

「あとはよろしく」

「わかりました」

この世界でも笑顔を絶やさない、愛すべき後輩に見送られて、祐里は司令室を出た。

駅前の大通りに近い住宅街の一角、住まう者が一人しかいない家があつた。周りに比べてどこか寂れた印象を受けるのは、やはり事情を知つているからだろうか。

結局、中位邪族の殲滅には恭也だけを行かせた。レベル4以上は他にいなかつたのだ。皆、現場からは遠い場所にいる。かといって、レベル3以下の隊員を向かわせるのは危険すぎた。一步間違えば命を落とす。実力が足りない者を行かせることは出来なかつた。

しかし、恭也も強いわけではない。レベル4では最下位だ。だからこそ、レベル6の恭子と組ませたのに。

- - 始まつたのか。一年前の……続きが。

確認したいことがあつて、法剣の所持者……星野恭子の自宅にじやつてきていた。鍵は本人から預かっているため、堂々と入ることができ。もつとも、なくても勝手に開けるつもりだつたが。人の気配は、なかつた。

恭子は学校だろうか。もしかしたら、悪いクセで丘にでも行つているのかもしれない。まだ短い付き合いだが、それなりに恭子のことを理解しているつもりだつた。

玄関の扉を開き、靴箱の上を覗き込む。

「……やっぱり」

小さな声が洩れた。飾り気のない写真立てに、懐かしくも悲しい

光景が、時を止めて写し出されている。

家族四人で恭子と並んでいるのは、よく知る亡くなつた両親と、そして - -

ピリリリリリリリリリリ。

無機質な電子音が、支部へ戻ろうとしていた祐里の思考を中断させる。

「もしもし、加奈？」

『祐里さん！あの、恭也くんが！』

加奈の慌てふためいた様子に、瞬間、過去の悪夢がフラッシュバックした。

「きょ、恭也は？無事なのっ！？」

取り乱して、あのときと同じ言葉を返してしまつ。固く閉じられた扉にすがりついて、ただ泣き叫ぶことしか出来なかつた、あのときと同じ言葉を。

加奈は祐里の反応に驚いたよつで、きょとんとしていた。

『えつと……大丈夫です、けど……ランクロの中位邪族に逃げられて、対象に足止めされています』

「そう」

その報告に、ひとまず安心する。

「人員、回せる？」

『いえ、誰も』

「わかつた、私が行くわ。実体化まで一時間以上残つてるわよね？
追跡は続けて。それと、周辺一キロ圏内のレベル2以上の一般人の
避難を。念のため、ね」

『はい』

彼が向こう側の人間だとは思えない。情報部から盗み出した情報
が正しければ。

けれど、人は変わるものだから。

(- - 間に合つて、お願ひ！)

祈るよつた気持ちで、祐里は走り出した。

* * *

祐里の恭也に対する愛情は、皆が思っているよりもずっと強い。ただ、まっすぐにそれを示すのが恥ずかしいだけで。

恭也が一緒に生活に幸せを感じること。恭也を大事にしてあげたいと思うこと。恭也に自分を好きでいてほしいと願うこと。

……パソコンといわれても仕方がない。

初めて恭也に会ったのは、十一歳のときだった。七つも離れていたが、それは一時惚れだつたのだろう。『可愛い』という気持ちが『愛しい』という想いに変わるものに、それほど時間は必要なかつた。内気な弟の腕をひいて強引に連れ出しが常だつたが、外の世界には楽しいこともいっぱいあるのだと教えてあげたかつたからだ。はじめ心を開ざしていた弟が自分から手を握つてくれたとき、どれだけ嬉しかつたか。いまでも鮮明に思い出すことができる。

十五歳になつた誕生日の夜、母は不思議な問いを投げかけてきた。
『守りたいもの、ある?』

静かに、優しくも厳しく、かすかにつらそうな表情をたたえて、母はそう言つた。

守るという言葉の意味を、その重さを、ちゃんと理解していかつた。だから、深く考えずに答えた。

『うん、あるよ。恭也のこと、守つてあげたい!』

どこまでも純粹なその想いは、大人になつた現在も変わってない。

『守りたい』

祐里にとって、戦う理由はそれだけで十分だつた。

* * *

靈山、双灰峰に続く登山道を背にして、一人の少年が向かい合っている。

どちらも剣を抜いているわけではないが、黒衣の少年は揺るがず、組織の制服を纏った少年は非難の色を込めて、お互に強い視線を注いでいた。

「 - - 恭也！」

祐里の一聲で、ふと空気がゆるむ。

「ここは私が引受けれるわ」

「……わかった。俺は、逃がした奴を追う」

身をひるがえそうとした恭也の腕を、祐里は反射的に掴んで引き止めた。

「深追いはしないで。三十分を切つたら、恭子ちゃんを呼んでかまわないから」

「でも、恭ちゃんは - - 」

「お願い」

じつと恭也の目をみつめて、必死に訴える。

「……わかったよ」

戸惑つたような表情を浮かべた恭也は、振り返ることなく市街のほうへ坂を下つていった。その後ろ姿が見えなくなるまで送つて、向き直る。

「蒼司くん、ね？」

「……貴女も僕のことを知つているんですね」

「いま、敵味方は関係ない。問いを発し、答えを返すだけ。

「四年間、ずっとあなたを捜していたのよ？」

そう、恭子は一日たりとも『日課』を欠かしたことなかつた。事件が起きた現場周辺での聞き込みや、当時の膨大な量の書類の閲覧。邪族や法剣の関係からも調査をしていた。もちろん、組織の人間として厳しい訓練や任務をこなしながら。

だがそれでも、祐里や恭也のように染まろうとはしなかつた。出来るかぎり学校へ行き、いつでも日常に - - 過去に戻れるようになり

境界線を引いていた。

「戻る気はないの？」

「特別なことはなくていい。ふつうに、平凡な生活を、蒼司と

過ごしたいんです。

胸に秘めた夢を教えてくれた恭子は、珍しくはにかんでいた。

彼女は考えたことがあつただろうか。もし再会できても、戻れる可能性は少ないのだということを。

「戻る？ どこにですか？」

「決まってるじゃない、恭子ちゃんのところよ。あの子はあなたを捜すためだけに、じつちの世界に入ってきたのよ？」

わずかに表情を曇らさせたようにも見えたが、それだけだった。

「あなたは、何がしたいの？」

自分から姿を晒しておいて何も語りひとつしない蒼司に、苛立ちが募つてくる。

「なんで、戻ったの？ なんで、まだ - -

さつきとは違う意味で、祐里は問いかけた。彼にも伝わっているはずだ。

「僕は、まだ終われないんですよ。やることが、ありますから」
儂げで、もうく壊れてしまいそうな蒼司の姿に、身に覚えのある悲壯な決意を見て取つた。

「あなたは……黒の家長を探しているの？」

ほんの少し、瞳の奥の濁りが増した気がした。

「 - - 今夜、姉さんに会いに行きます」

「えつ？」

突然の宣言に驚かされる。

「 いつも監視されていますから、たぶん包囲されるでしょう」「何を考えているの？」

その存在には気づいていて、あえて無視していたのだが - - 監視？
「姉さんに接触すれば、うちの上層部は法剣を奪おうとするでしょう。いまのところ中立 - - 相互不干渉ということになっていますけ

ど、おそらく神代も動くはずです

「あなた……」

「いい加減、終わらせましょう。長引けば、傷つく人が増えるだけです

てつくり、相手方がどう動いてきたのかと思つていた。だが、違つた。

蒼司は本当に終わらせたいだけなんだ。復讐したいわけではなく、この状況が生み出す理不尽さが許せないだけ。祐里には、その気持ちがよく理解できた。嘘でないこともわかつた。

「貴女は適当な理由をつけて、御神の本家に僕を連れて行ってくれればいいですから

「……私があなたの言つことを信じるとでも？」

「信じなくとも構いません。それなら、ほかにも手立てはあります」
揺さぶりをかけようとした祐里の言葉を、あっさりと切り捨てる。
「けれど、終わらせたいのは同じでしょう？ 風見祐里さん」

「どうして、私のことを……」

「一年前、湯沢の研究所にいましたよね？」

「 - - つ！」

嫌なことを思い出させてくれる。

「僕もいたんですよ。もちろん、別件ですけど」

「……いいわ。それで？ 何か、手伝うことはある？」

「これを - - お願いできますか」

蒼司は懐から取り出したものを、祐里に差し出した。恭子に渡せと、そういうことだらう。

「預かるわ」

蒼司が無言でいるので、御開きだと思つて立ち去ろうとしたが、ふと気がかりができて足を止めた。

「包围されるつて言つていたけど、二人で大丈夫？」

「ええ。神代に勘づかれたら元も子もないですし、姉さんも法剣を持っているんでしょう？」

「そう、ね……」

「ともなげに言ひ蒼司を、なぜだらうか、祐里は空恐ろしく思つた。

「それじゃあ

数歩あるいて振り返つたとき、黒衣の少年はもういなかつた。気を取り直して腕時計を見やると、逃げた中位邪族の実体化まで三十分なかつた。

恭也は、ちゃんと恭子を呼んだのだろうか。それとも、追いついて滅ぼせたのだろうか。急に心配になつてくる。

加奈に連絡して聞いてみようかといつ矢先、携帯が鳴つた。恭也からだ。

「もしもし？」

「祐里姉、ちょっと頼みがあるんだけど・・・」

* * *

この場所から、街の全景を綺麗に見渡すことができる。人工と自然の調和が作り出す景色。

そこには笑う人がいて、泣く人もいて、一瞬一瞬のうちに様々な出来事が繰り広げられているのだろう。

ときに心が傷つくのは構わないと思う。それでも、人は未来を望んで小さな - - それでいて大きな一步を、踏み出していくはずだから。

だけど、日常を壊すようなことは決して許せない。命といつ、取り返しのつかないものを奪おうとする - - 純粋なだけの、透明なだけの力を、私は許さない。

多くの人たちが何も知らないで安心して生活できるように、日常を守るために、私たちには力が与えられているのだと思うから。私たちは闘う。すべてが終わる、そのときまで。

SS・1・1・風見祐里（後書き）

恭子が、丘で考え方をしていた時間。ファミレスでの会話の詳しい説明。あとは黒封筒の行方。

事件の全体像や組織の過去なんかも見えてくるようにしました。何か思うところがあつたなら嬉しいです。

たまに哲学的な本を読んだりすると、現実ってなんだろうと考える。

人が人を殺すという、忌むべき同族殺しの蔓延した世界。

わたしにとっては、堪えがたい恐怖をもたらすものだ。

いつだつたか、文芸部の友達が冗談めかして言つたことがある。

- - 化け物が人間を殺すぶん、ファンタジーの世界のほうがマシかもしけないね。

本気でそう思うほど、一年前のあの事件は、わたしの心に深い傷を刻んでいた。

けれど、ただ被害者であつたわけではない。

わたし自身も一人の女の子を殺してしまったのだ。

ずっと知っていたはずだけど、それを自覚してはいなかつた。

始まりは、現実と非現実が交差した日。ふたりの少女との出逢い

* * *

初めて彼女に会つたときから、どことなく陰があるようにはみえた。べつに表情や態度に出ていたわけではない。なんとなく、そう感じただけだつた。

快活そうな外見とは裏腹に、一言でいつてしまえば - - おとなしい子だつた。口数も多いとはいえないし、微笑みも控えめで、感情の起伏が少ない子ではあつた。けれども、ごくふつうの女の子だつた。

他人と違うところがあるとすれば、一週間のうち一日 - - ずっと見かけないときもあつたが - - 学校を休むことだらうか。

遅刻・早退・欠席はあたりまえ……なのに、容姿端麗・成績優秀・

運動神経も抜群ときている。そのせいか、妬みや僻みの対象にもなつていた。

クラスの女の子たちは、そんな彼女と親しくなるつとは思わなかつたらしい。

まあ一般論から言つても、学校に来られない子はどこでもそんな感じだ。たいてい孤立していく。だけど、本人は気にしていないようだつた。

不自然だとは思つていた。

欠席の理由としては風邪が多いけど、翌日に治つたのかと聞くと、一回きよとんとしてから思つ出したように返事をするのだ。でも、嘘をついているときのような焦りとか、そういうつものを彼女は感じさせなかつたから、お母さんが過保護なのだろうと、そのくらいにしか思つていなかつた。

本当に不思議な子だ。

なぜ彼女に惹かれたのかは、いまいちわからない。気がつけば毎日、彼女の様子を見に行つっていた。進級してクラスが変わつても、たまにしか会えないのに、彼女のことがどうしようもなく好きだつた。些細なことにも耳を傾けて笑いかけてくれると、ふかふかで温かく包まれているような、くすぐつたい感じの幸せな気分になれる。

わたし自身は友達が少ないわけじゃない。むしろ、多いほうだと思う。だから周りの友達からも、なんであんなのと……なんて言われちゃつたり。

そうすると、なんでこんなのと……なんて考えてしまつ。欠点はないけど、特別に長所があるわけでもないから。

けれど、結局わからなかつた。理屈じやないのだ。ずっと一緒にいたい、もつと知りたいという欲求みたいなものは。

きっと、わたしの初恋だと思う。共学校なのに変だけど。

文芸部で小説に昇華していたのは、そんな一途な恋心だつた。

* * *

春が終わるつかといつもある日。前触れもなく、突然それは姿を現した。

学校の帰り道のこと。いつもと同じように、おしゃべりをしながら歩いていたわたしたちは、一いちらにいらむ野良犬の群れと遭遇する。

道路の真ん中を占拠して動こうとしないのを不審に思つて、恭子ちゃんに話しかけた。すると恭子ちゃんは、なぜか驚いたようにわたしを見た。

野犬の群れが吠えながら向かってくると、恭子ちゃんは身を硬くしたわたしの腕を引いて走り出した。

凄い速さで、半ば引きずられるように、恭子ちゃんと住宅街を駆けていく。握られた手から伝わるぬくもりに、不謹慎だけど、少しどきどきしていた。

息を切らせながら必死に走つても、追つてくる野犬の唸りは全然小さくならない。

「あつ」

わたしはかすかに声を発した。丁字路で恭子ちゃんが選んだ道は、行き止まりだと知つていたから。

「そんなつ！」

すぐに恭子ちゃんの絶望的な声がして、わたしたちは足を止めた。行き止まりで立ち往生、袋のねずみ。ずっとつないでいた手を離して、恭子ちゃんはわたしをかばうように前に立つた。

「……目を閉じて、耳を塞いで、そこから動かないで。わかつた？」

「……うん」

恭子ちゃんの手に握られた剣を見て、困惑しながらも頷いたけれど、わたしはそれほど聞き分けのいい子じゃない。

興味があつたのだと思つ。今まで知ることが出来なかつた、恭子ちゃんが学校で見せるのとは違う一面に。

この時点ではわたしは、それが非現実への入口だつたのだと気がついていなかつた。

恭子ちゃんの低い眩きを耳にして、わたしは、そつと扉を開いた。瞬間 - - 真紅の輝きが視界を埋め尽くした。その熱く感じるほど眩しさに耐えられずに、光を閉ざしてしまつ。

しばらくして薄く目を開けると、そこには初めて見る少女が存在していた。冷たい氷の仮面を張りつけて、襲いかかる動物を明らかに敵視している。

野犬を相手に真剣を振るう女の子。次々と頭部を、胴体を斬り捨て、その剣には肉片がこびりつき、蒸発する。見るに堪えない、ふつつの神経なら吐き気を催す、異常な光景。

だけど、わたしには恭子ちゃんの華麗な剣の舞しか見えていなかつた。

(- - きれい)

無駄な動きのない演舞に、わたしはすっかり心を奪われていた。野犬の群れがまとめて消えたことに、なんの疑問も持たず。

恭子ちゃんが息をついたとき、はっと我に返つて、慌てて顔を伏せた。

「もう……いいよ」

恭子ちゃんの言葉におそれおそれといった感じを装いながら、両耳を塞いだ手を下ろして、目を開いていく。演技は - - 人を騙すのは意外と得意だった。誰もそんなこと思わないだろうけど。

恭子ちゃんは申し訳なさそうに、後ろめたやうに、暗い表情で目をそむけていた。

- - 何か言わなきや。

そう思つて、自然と零れ出したセリフは - -

「 …… 怪我、してない? 」

「え? 」

恭子ちゃんと一緒に、わたしも驚いていた。違う意味で。

その言葉は確かに本心から出たものだと思つ。けれども、なんだ

か心がざわついた。

(いい子ちゃんぶつてるつもり? 何をやつてるの、わたしは……)
その訳もわからず、自己嫌悪に陥った。

黒塗りの車が田の前で止まって、それにわたしが乗るのだとわかつたとき、ようやく気がついた。もう、非現実の世界に足を踏み入れてしまっていたことに。

「すみません。迷惑ばかり掛けてしまって」

「別にいいわよ。ちやんと誘導できなかつた私たちにも非はあるしね」

黄金色の髪の女性は、そう言って恭子ちゃんに笑いかけてから、運転手の人には話しかけた。社会人にしては若いような気がするし、大学生にしては立ち振る舞いが堂々としている。

「それじゃあ、お願ひね。私の部屋に通していいから……ええ、すぐに行くわ」

この道が一方通行だとは思つていなかつた。このときはまだ、戻つてこられると思つていたんだ。

* * *

「じばらぐの間、こちらでお待ちいただけますか?」

「は、はい……」

小さく返事をすると、案内してくれた女性は穏やかな微笑みを浮かべ、廊下の向こうへ歩いていった。

大仰に隠しをされてまで連れていかれたのは、なんの変哲もない商業ビルのようだつた。ただ、どこにも窓がなくて地下にいるような感覚を覚える。すぐ近くで市内のはずだけれど、何度か違う道を走つたみたいで、右とか左とかは分からなくなつてしまつた。

学校の教室にあるような横滑りの扉を開いた先は、質素な装飾の個室だつた。デスクとベッドがあるだけで、狭くはないが広いわけ

でもない。詰め所のよろなものがと懸つ。まさか、ここに住んでいるわけではないだううし。

壁に掛けられた時計を見やると、学校を出てから、まだ一時間も経っていなかつた。

どれだけ待てばいいのだうか。ぼうつと立つてゐるだけというのも、結構疲れる。わたしは手近にあつた椅子を借りることにした。外からは、わずかな物音も届いてこない。完全な静寂だった。

(なんで、こんなところにいるんだる……)

ひとりで頭の中を整理していると、ふと思つた。

確かに、わたしは恭子ちゃんのことを知りたい。だけど、わがままかもしれないけど、付属するその他もうもろと関わりあいにはなりたくないのだ。いまは、あくまでも傍観者の立場。もし同じ立場になるのだとしても、それは全部を知つてから。わたし自身がそう決めたとき。とにかく、この状況には不快感があつた。

通つてきた廊下には、ほとんど人がいなかつたみたいだし、もしかして意外と楽に外に出られるかもしない。

椅子から腰を上げると、閉めたばかりの扉の前で立ち止まって、深呼吸をする。

(恭子ちゃんに怒られるかな……)

不安とこゝか、心配といふか、大きな悩みの種も浮かんできたが、はやく行動に移さないと決心が鈍るような気がした。

きっと、大丈夫のはずだ。わたしは望んでここにいるわけじゃないし、恭子ちゃんのあんな姿を見たからといって彼女を避けるはずもない。今度だつて、何も知らないように普通に接すれば、恭子ちゃんなら解つてくれる。逃げるんじゃない、帰るんだ。

自分のなかで正当な理由を作つて、納得させる。わたしは卑怯なんかじやない。

そんなことを一生懸命に言い聞かせていると、不意に扉のほうから勝手に開いた。

「あ……」

扉の向こうには女の子がいた。「ここに来るまでに何回か見かけた、少女には不似合いの灰色の制服を着て、頭には置いてピンで留めるだけの帽子が飾られている。

ぱつと見では気づかなかつた、けど――

「また、見捨てるの？」

ぱつりと呟いた。たつたそれだけなのに、肩がびくんと震えた。一気に噴き出した汗で全身が冷たくなり、静かな迫力に押されるようになってしまった。

「か、加奈ちゃん！？」

動搖にうわずつた声が発せられる。

(- - なんで！？あのときの子が、なんで！？)

わけがわからなかつた。頭が真っ白だったのは一瞬で、すぐにパニックになつた。

碧眼の少女は室内に入ると、扉を閉じて逃げ道を塞ぐように目の前に立ちはだかつた。そうして、まっすぐに射抜くような視線を向けてくる。

たつた数日いつしょにいただけだが、忘れられるはずもなかつた。もつとも、思い出したのも久しぶりだが。

「自分で逃げるんだ？」

「わたしは巻き込まれただけだよ！」

まるで全てを知つているというような口調で、少女は嘲笑する。

「でも、彼女の友達なんでしょう？友達なのに、逃げるの？」

話の流れがどこからくるのか、いきなりで脈絡がないように聞こえるが、言葉の断片だけでも、鋭い刃のように心に突き刺さる。そして、痛い。

「あのとき、友達になつてくれるつて言つたよね？」

過去と現在をつなぐ魔法のように、少女の独白はわたしの記憶を鮮明に甦らせようとする。

「やめて……おねがい、いわないで……許してよお……謝る、から

……お願ひつ！」

年下の女の子に赦しを乞うのは、みじめだった。けれど何を言われるのか解っていて、それでも受け入れたくなかった。汚い人間なのだと、自分が嫌悪する現実の住人と同じなのだと、認めたくなかつた。

「それなのに、一人で逃げちゃった」

「いやああつ！」

罪悪感はなかつた。逃げれるとthoughtた、だから逃げた。本当にそれがだけだつたんだ。苦しくなつたのは、警察に保護されたあとだつた。

「絶望だつたよ。気がついたら友達はいなくて、ひとりぼっちで。美里ちゃんが逃げちゃつたときに、私はもう死んじゃつたの。だから、そのあとは全然つらくなかった。どうしてか、わかる？」

「わ、からない……うくつ」

「目的ができたから。それで私はここにいるの。すくべひどい目にあつて、本当に死にそつにもなつたけど、ここにいるの。なんでだと思つ?」

「や……わから、ない……よお」

「 - - 貴女を殺すために決まつてゐるでしょ！」

激昂して声を荒げた少女は、無造作に腕を伸ばして、わたしの首を掴んだ。

「あ、うぐつ……かな、ちや……」

見つめた青い眼に、負の感情以外、何も見いだすことは出来ない。どれほどの力が、怒りが、憎しみが、その細腕から生まれているのだろうか。片手だというのに、首筋に強く指が食い込んだ。

わたしにだつて加奈ちゃんの行動は理解できるつもりだ。恨まれても仕方ないとthought。自分が助かることしか頭になかつたのは、紛れもない事実だから。逃げる以外に方法はなかつた。わたしは弱いから、何もできないから。死にたくなかつたんだ。

だけど、過去に見捨てた少女に殺されようとしていて、なんだか悲しかつた。死にたくないと、あのときのようく強くて思えなかつた。

た。わたししが誘拐犯の男に抱いたものを、この女の子に抱かれているのだと思うと、とてもつらかった。

結局、わたしはどこまでも偽善者なのだらう。恭子ちゃんに対してもそう、加奈ちゃんに対してもそう。

もう口にできない、いえなかつた謝罪の言葉を胸の中でしぶやいていた。

(「めんね、加奈ちゃん……）

荒々しく扉が開かれる音と、

「加奈つ！」

遠くで聞こえた女のひとの叫びを最後に、わたしの意識は暗い海の底に沈んでいった。

* * *

「うん……んんつ」

息苦しさを覚えて、拡散していた意識が急に収束していくのがわかつた。

「お、気がついたみたい。えと、なんて名前？」

「……美里ちゃん、です」

「おーい、美里ちゃん。大丈夫かあ？ちゃんと意識があるんだつたら、右手を上げてくれる？できれば、なべても上げてほしこんだけど」

「……先生、めちゃくちゃです」

「だつて、はやく寝たいんだよ。昨日も徹夜だつたんだからね」

誰かがわたしを呼んでいる。どうやら学校らしいけど、保健室の先生はこんな人だったろうか。それに、聞き慣れないが懐かしい声も混じつていた気がした。

「んつ……」

身じろぎをするのが精一杯で、腕とか足とかが麻痺したように動かない。

「あriや、だめかな。まだ、朦朧としてるのかも。覚醒剤でも打つ？」

「……やめてください」「こ？」

一緒にいる女の子は元気がないようだった。その小さな声が、何故だか胸に痛い。

学校の保健室とか病院でおなじみの、つんとした消毒液のにおいが鼻をつく。けれど、ここは本当に学校だろ？ 何か大切なことを忘れてしまっているように思う。そもそも、なんで寝ているのだろう。

「あー、ちなみに言つておくとだな、ここは学校じゃないよ。むろん、病院でも家でもない」

わたしは何をしていたんだっけ。どうして、こんなに首が痛いのだろう。というか、意識がはつきりしてくるにつれて、激痛になつてくるような。

「美里ちゃん。残念だけど、あなた死んだのよ？」

「先生っ！」

極めて真剣な女性の言葉に重ねて、女の子の悲痛な叫びが耳に響く。

死んだ？ 誰が？

「怒らないでよ。軽いブラックジョークでしょ？」

そうだった。わたしは死んだんだつた……なんで、意識があるの？ 思考がとりとめもなく錯乱している。

なんで死んじゃつたんだっけ。えっと……

息ができなくて……誰かに首を絞められて……そうだ。女の子が

がばつ！

「……ほつ、ほつ！ けほつ！」

思い出して、勢よく起き上がつたけれど、痛みと苦しみが同時に襲い掛かってくる。

「ひら、急に起きちやだめだろ！ 右手を上げなさいって言つたのに

「大丈夫！？」

慌てて、二人が崩れかけたわたしの身体を支えてくれる。

「ほり、ゆっくり息を吸つて。下を向いちゃだめだからね…」

白衣を着た女性が、わたしの背中を優しくさすりながら言つ。女の子はぎゅっと手を握ってきた。

鈍い痛みがある首に空いているほうの手をやると、大げさなほどに何重にも包帯が巻かれていた。これでは、動かそうにも動かないけど、本当に痛い…。

少しづつ呼吸が落ち着いてくると、わたしはきょろきょろと部屋を見渡していた。かなりの広さがあつて、いくつもベッドが置かれている。そのうちのひとつに寝ているわけだが、周りには、いろんな薬品や薬物が納められた棚があつたり、見たこともない機器の数々が並んでいたりする。

「あ、れ？ なんで、わたし…」

死んでない。そのことが不思議で、複雑な気持ちになる。

両手でわたしの左手を包み込んでいる女の子は、つらそうに顔を歪めて俯いていた。

「……加奈ちゃん？」

怯えるように、びくっと肩を震わせる。黒瞳の双眸が、ひどく揺れたようにも見えた。

「もう、平氣？」

加奈ちゃんの様子を気に留めてか、横から医者とも研究者ともわからない格好の女性が声を掛けてくる。

適当に梳いているのがありありとわかるショートヘアが印象的。そのわりに整つた顔立ちをしていて、美人といつて差し支えないかもしれない。年齢は……不詳。三十代といわれても、大学生といわれるても、どっちでも納得できてしまう。

「はい。意識はしつかりしてます」

- - 状況は把握できていません。

「そう、よかつたわ。一応、自己紹介をしておくと。あたしは、佐

倉涼子とここおむ。「の子と・・しづらいくせ、あなたの主治医にもなると思ひけど。とりあえず、よろしくね」

微笑みかけられても困つてしまつ。挨拶を返せず、わたしは聞

き返した。

「主治医……ですか？」

「念のため、よ。ちょっとした検査を定期的に受けでもらひだけだから

から

「はあ」

釈然としないものが残る。けど、そんなことはどうでもよくて。「さつき何か聞こえたと思うけど、冗談だから。死んでないよ、わざかに黄泉の階段を上つたくらいだし

あぐびを手のひらで隠しながら、平然とそんなことを言ひ。

「いま、何時ですか？」

田を覚ますと時間を確認したくなる。それは普通に寝ていても、気絶しようが昏睡しようが同じことだらう。場所も場合も関係ない、習慣のよつなものだ。

「んと……夜の十一時になると、安定期のはつこさつきだから、まだ寝てなさいよ。あたしですから笑えないほどだつたんだから。祐里がいなきや、どつなつてたことか」

「祐里さん？」

「うん、風見祐里。」この副司令官なんだナビ……って、言つていいんだつけ？」「

「……大丈夫だと、思つます」

加奈ちゃんは力なく答えた。どうして、こんなに沈んでいるんだら、わたしを殺し損ねたから？

脳裏をよぎった考へに面凧する。助かったのに、蒸し返してゼリつする。

「会つたでしょ」「え？」

「え？」

じつと加奈ちゃんに見入っていたら、反応できなかつた。

「迎えにいつたひと」

三秒くらいに考えて、そういえばと思いつたる。名前は聞かなかつたけど、恭子ちゃんと親しそうにしていた、あの綺麗な女性だ。

「祐里が、わざわざ運んできたわけよ。まつもおな加奈もセシトで」

「…………」

「もー、ずっと泣いててさ。大変だつたわよ。祐里は緊急だとかで司令座のほうに戻つちやつし、あなたはこつまでも死神とランティブーでしょ？」

面白じたとえをするんだなあと、頭の隅っこで文芸部員として感心したのは、さておき。

加奈ちゃんが、泣いてた？あんなふつに怒りをあらわにして、わたしに掴みかかつたこの子が？そういえば、ちょっと目が赤かつた氣はする、けど……泣いてくれたの？

「誤解を解くために言つておくとね。あなたが会つたのは、加奈であつて、加奈じゃないわけよ。よくわかんないだろ？けど」

「先生！」

弾かれたように顔を上げて、加奈ちゃんが抗議する。

（ - - えつ？）

「こま！」の氣づいたけど……田の色が、違う？

「なによ、自分で言えるの？」

「そ、それは」

祐里さんの部屋で会つたときは蒼い眼だつたはず。これは間違いない。なにもかも見透かされるような、吸い込まれるような恐怖を感じたから。

でも、いまは - -

「加奈ちゃん、その瞳」

「 - - つー」

驚いたように、澄んだ黒真珠がわたしを見つめた。

「あれ、気がついた？」

愉快そうに涼子さんは目を細める。

「まあ、この子にもいろいろあつてさ。なんていうか……特異体质、かな？好ましくない感情が大きくなると、スイッチが入るっていうの？見た目で区別できるのは、瞳の変色くらいなんだだけね」
適当な言葉を探しながら説明しているみたいで、わたしにはどうにも理解しづらかった。

「簡単にいつちゃうと、一重人格って思つてもらえればいいのかな？」

「一重人格……」

とてもわかりやすかつたけど、それは何か違う気がした。なんとなくだが。

「厳密には……つてか、本当はそんなんじゃないけど、あとは本人に聞いてちょうだい。ま、聞かないでおくのも優しさだけね」
そういうて涼子さんが視線を送つても、加奈ちゃんは何も喋らつとはしなかった。肯定も、否定もしない。

わたしは苦しんでるだけの加奈ちゃんを見かねて、何か声を掛けたいと思つた。それなのに何も浮かばなかつたから、結局さつき伝えられなかつた言葉を口にしていた。

「……ごめんなさい！」

「えっ！？」

いきなり傷つけた相手に頭を下づられて、加奈ちゃんは困惑しているようだつた。

「なんで、美里ちゃんが謝るの？」

「二年前のこと、わたし……」

加奈ちゃんが息を呑んだのがわかつたけど、言い訳になるつてわかつてるけど、言わなきやいけないと思つた。

「わたし、加奈ちゃんと友達になれて嬉しかつた。ひとりじゃないつて思つて、心強かつた。本当だよ？……でも、やっぱり怖くて、死にたくなくて。だから逃げだしたとき、ほかのこと何も考えられなかつた。信じてもらえないと思うけど、見捨てたんじゃないの。」

ただ、余裕がなくて……保護されて助かつたとき、すぐくつらがつた

自分を弁護するついで必要なことは全部いつたはずなのに、言葉がとまらない。

わたしのちっぽけな良心が黒いものを許さないみたいに、感情が昂つて勝手にすべてをさらけだそうとする。

「……けど、加奈ちゃんが死んじゃうかもしれないって思ったとき……かわいそつて、それだけだつた。それよりも、自分が助かつてよかつたつて。わたし、こんな汚い人間なんだよー加奈ちゃんに恨まれて、当然だよつ！なんで……なんで、わたし生きてるの？ねえ、なんでなのつ！？こんな、おかしいよ……わたしなんか、死んじやえばよかつたのにっ！」

だんだん何を言つているのか、何が言いたいのかわからなくなつて、泣き出してしまう。

卑怯だつてわかつてた。いいじで泣いたら、誰も責められない。だけど、溢れだす涙は止まりそうになかった。

そんなふうに気持ちを吐き出したわたしの手を握つたまま、加奈ちゃんは慈しむように慰めてくれようとする。

「謝らないで。美里ちゃんは悪くないよ……だつて、美里ちゃんはふつうの女の子だもん。年上だとか、そんなの全然関係ない。怖いものは怖いよね。それに、しつかりしないといけないのは私だつたの。だから、いいんだよ。泣かないで……私なんかのために、泣かないでよ」

「そんなことないよ！わたしのせいだ……」

「いいの……ごめんね……ごめんなさい、ごめんなさい」

それから日付が変わるくらいまで、わたしたちは泣きながら謝りつづけていた。

特別そのこと 자체に意味があつたわけではない。

加奈ちゃんがわたしを赦すというのはありえないことだし、あつてはいけないと思つ。けれど、お互の心のなかの何かを解りあえ

たよつな - - そんな気がしていた。

* * *

気高い慈悲の天使、恭子ちゃん。

彷徨う薄幸の墮天使、加奈ちゃん。

一緒にいたいと想えるひと。そばにいてあげたいと想うひと。
それは、恋とは呼べないかもしない。けれど「好き」という気持ちが、たしかに心の温かい場所にあった。たぶん、嫌われても嫌いにはなれない。

とりあえずは - - その笑顔を、その涙を信じたいと思つ。どんな明日が来ても、一人がいてくれれば大丈夫な気がするんだ。
だけど、どちらかを選ばなきやいけなくなつたとき、わたしは恭子ちゃんを裏切れるのだろうか。加奈ちゃんをまた見捨てることができるのだろうか。

いまはまだ、何もわからない。そう、先のことは何も - -

SS・1・2・柚原美里（後書き）

美里が、ただの恭子の友達ではなく、組織と接点があるところを設定。
サイドストーリーで初めて登場した、神代加奈ちゃんが実は凄い重
要。

第一章が書きたくなりました。読んでくださる方は、気長に期待し
てください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4857a/>

光と闇の法剣-Side:A-

2010年10月8日15時27分発行